

## [COMMUNION]

WEB:<http://www.nskk.org/tokyo/index.html>

E-mail:comm.tko@nsk.org

PHONE:03-3433-0987

FAX:03-3433-8678

Diocese Office



(教会への提言 2)

## クリスチャンとは責任を負う者

司祭 バルトロマイ 竹内 謙太郎

聖パウロはコリントの信徒への第1の手紙で教会はキリストの体、私たちがその肢体であると言っている。この言葉が意味するところは私たちにとって極めて重大である。それは、キリストの働きその思い、そしてその地上における生きる姿が、直接、私たちの生きる姿、働き、日常的な行動に投影されると言っているからである。別の表現をすれば、私たちは、クリスチャンと呼ばれている者はその言動においてキリストと同じになれと言われているという意味になるからである。クリスチャンとはキリストのような人、と言っても良いのではないか。

また、キリストは、私たち人類の罪を負って、自らその贖いのために十字架につかれた、とも教えられている。自分の責任でもないことを自分の責任としてその責めを負ったということである。今日的な表現をすれば、キリストとはあらゆる人間の課題に直接向き合って、その当事者としての立場を鮮明に示したということになる。

うか。もし、教会がキリストの体とまっとうに受け止めれば、そして一人がその肢体であると受け止めれば、キリストと同じになれと言われる私たちクリスチャンは、この世界の多様な課題の当事者となるべきであると言いうことになる。身近なところから始めるだけで良い。もし、私たちの教会に何か課題があるとすれば、それは私たち一人一人がその当事者であるという自覚がなければならぬということだ。人の社会に課題がない筈はない。人の社会としての教会にも課題は当然あるのがある。それらの課題に対して私たちはその当事者である。さらに社会、そして世界大に広がる人間社会の課題の、私たちは当事者である、またならねばならぬ。それがキリストのようになる、つまりクリスチャンとなるということではない。



いだろうか。責任を感じられるような人であるのか私たちが、ということだ。受難の直前、キリストは弟子の一人に向かって、「お前は私の受ける洗礼を受ける覚悟があるか」と切迫した問いかけをなさる。弟子は「はい、受けます」と答える。それは勿論キリストの十字架を共にすることが出来るかとの問いかけと答えである。ここからは自明である。ここから私たちは洗礼とは、まさにキリストと同じになることは理解できるようになるのではないだろうか。

最も身近な自分の属している各個教会の事情を見てもう。そこに何か課題はありますか。どのように小さなことであっても、その課題は私の課題だ、と受け止められますか。それを自分の責任として背負うことを当然と思われませんか、どうでしょうか。どのように些細なことでもすべてのことを自己の責任範囲にある、とする当事者意識こそが、今、最も欠けたものとして我々の目前に置かれているのではないだろうか。誰かの責任だと言い放つのは簡単だ。すべては私の責任だ、とすることがクリスチャンとしての本物の在り方だと言いたい。キリストのように生きるには、先ずそのようなことなのではないだろうか。ご批判を乞う。

司祭と語ろう(特別編) 後編

主教 植松 誠

― 首座主教ならではの困難さがあると思われませんか？  
植松 ご存じない方が多いのですが、いろんな教区や教会で様々な問題が起こった場合「どうして首座主教がここにもっと関わってこないのだ」「首座主教は何をしているんだ」と言われま

すが、日本聖公会の場合は私がそこに乗り込んで行って問題を解決することは許されていません。もちろん、だからと言って何もしないわけではなく、私も心を痛めながらその主教と話し合い助言をしたりはします。また私は主教会の議長ですから主教団としての助言や忠告を取りまとめ当該主教に話します。そのような私の立場がなかなか理解されていない点は辛いところがありますね。会社でいうと社長より会長という役どころでしょうかから説明すればするほど「そうやって逃げていく」「責任を取ろうとしない」と言われる方もおられます。

― 辛いところですね。

植松 私は北海道教区の主教であるということを超えて、大事にしたいと思っています。しかし多い時には週に3回ぐらいい東京に来なければならぬし、海外出張も多く、北海道は土地も広い大きな教区で、私が理事長をしている施設も多くあります。どの主教が首座主教になられても同じでしょうが、やはり2つの責任



があるというのは体力的にも精神的にも大変です。

― そのような大変さを感じさせない精力的な印象をうけますか？

植松 北海道のある教会に巡回した時、愛餐会の中で信徒に「主教はどうしていつもそんなに元気なのですか？」と質問されました。「そんな元気じゃないこともしょ

ちゅうあるんだけどな」と思

い、答えに詰まっています。すると家内が「皆さんは元氣だと言ってくださいませがそれでもありません。重責に押し潰されて疲れて落ち込むこともあり、時には聖職という本分を忘れてもすることがあります。でもこのように巡回して皆さんと一緒に礼拝を捧げ、ご聖体に与り、愛餐会で交わることによって正気に戻されているのです」と答えました。私は「よくぞ言ってくれた」と思いました。本当にその通りなのです。

― 私はよく奥様を存じ上げていますが、うわべだけでなく本質を突く素晴らしい考えをお持ちの方です。よね、主教の横にいるというより、ちよつと離れたところから見

てサポートされるような良きパートナーですね。  
植松 ありがとうございます。本当にそうだと思います。以前、東京教区の教区フェスティバルに招かれた時に説教で「私のいい里帰りだ」と言ったことがあります。私は総主事の頃家族と杉並

― 思われますか？

植松 他の教派のことは分かりませんが、一言でいえば居心地のいいところでしょうか。

カトリック的などころあり、福音派的なところあり、わりと自由でどこにいても良いみたいな感じがします

もちろん信仰生活の中で聖餐によって私達の命



が養われているという聖餐式を大事にしている点もあります。

家内は「聖公会はこのいい加減さゆえに何とか信徒であり続けることができる」という言い方をします。「いい加減」という言葉は、けつして

マイナスのイメージではなくて、聖公会の持つ寛容さ、柔軟性をあらわしています。よくいえば、信仰的に落

区下井草に住んでいました。

私達家族にとっては一番辛い時期でした。心の準備もないままにいきなり大阪からの転勤で、子供は中学生と小学生、中学生だった長男は登校拒否になりました。私は毎日最終の電車で帰る日々でした。仕事もたしかに慣れないし忙しかったのですが、家に帰るのも辛かったのです。その上、毎週どこかの教会で説教をしなければならず私は疲れきっていました。家内は毎朝、当時の澤先生が優しく迎えてくださる阿佐ヶ谷聖ペテロ教会に行っていました。祈ることしかできなかったものでしょう。私はある時家内に「うち

の中がこんな状況で説教なんてできない。もう全部断る」と話しました。すると彼女はこう言ったのです。「物事が順調な時に感謝とか喜びだとか言うのは誰でもできること

でしょうか。肝心なのは逆境にある時にどういうふうか福音を福音として得られるかであり、その逆境の中で福音を語るためにあなたは召されたんじゃないのですか」。そ

の時は凄く頭にきて2、3日は口をききませんでした。その通りなのです。だからそんな辛かった時代を経て今の自分がいてその時のことをこんなふうには話ができるようになったので「私のいい里帰りだ」という話をしたので

― 話を交えますが、今、宗教離れが進み聖公会の信徒数は減少傾向にあります。主教会の中でそれについての打開策などを話されることはありますか？

植松 教会の危機というものは、今、急に起こったものではなく、どの時代にもあり、頭を悩ませ苦勞を重ねてきたはず

2012年に浜名湖で宣教協議会が開催されました。そこで教会離れについての特効薬をみんなが求め、話し合いました。そこで解決の道が見いだせるのではないかと期待する人達も多かったのです。しかし、あれだけ話し合いをしたにもかかわらずいよいよの特効薬的なものは出てきませんでした。その時に出された「宣教・牧会の10年・提言」は、教会

ちこぼれの人をつくらないという

植松 そういうことです。

― 最後に何か東京教区の信徒の方にメッセージをお願いしたいのですが。

植松 困りましたね・・・、東京教区の信徒というより皆さんに向けてですが、私がいつも言っているのは、信仰生活に忠実であってほしいということです。そのために「聖書を読むこと」「祈りをする」と「教会の礼拝に通うこと」の3つを絶対に欠かさずに必ず行なって、生活の中心に置いてください。その中に私達の信仰の基本があります。それらを疎かにして、何を言っても何をしてもそれは全努力を持ちません。

あと私は北海道のいく先々の教会で信徒の方々に大切にされているという思いを感じるのですが、そのことが私の信仰の力になります。ぜひ、そのように大畑主教さんのことを大切にしてください。

― わかりました。今日はお疲れのところ、どうも有り難うございました。

「障がい者」関連活動連絡会

新規点字プリンター購入

昨年、当会は新規点字プリンターを購入し、11月11日、牛込聖バルナバ教会のご好意で、聖バルナバホールに設置させて頂きました。2012年に購入を決め、資金を得るためイベント等を行い、温かいご支援に支えられ、ようやく実現したものです。皆様のご支援に感謝致します。1月8日、当会の大森チャプレンと橋本司祭にプリンターを祝福して頂き、みんなで聖霊の働きに感謝を献げました。



点字プリンターは点訳文章や画像をパソコンから点字として印刷出来る便利な機械で、点訳活動には欠かせません。新機種はスウェーデンのインテックス社製の、旧機の後継機エベレストV4です。操作は旧機に類似し、印刷速度は少し速く、見開き両面印刷も可能です。既に、外濠グループ主催のクリスマス会プログラムや、

はなくとも、必ずいらっしゃるはず。日頃、沢山の文書を作成・配布しますが、それを読めない方を忘れがちです。それは、イエス様が出会いを望まれている人。私たちの働きが、そのために用いられることを願っています。点字に限らず、障がいを負う人が共に歩める教区・教会となりますように。

海宝晋一(点字担当)

新執事誕生

太田信三執事按手式(1月9日)

2016年

の新年を飾るにふさわしい太田信三聖職候補生の執事



按手式が聖アンデレ主教座聖堂で行われた。すがすがしい晴天の中、参列者は聖堂には入りきれず、隣りの聖オルバン教会にスクリーンを置き礼拝をしなければならぬほどであった。その数約350名。

按手式は入堂聖歌である389番の歌声が聖堂いっぱい響き渡り厳かに始められた。それはまるで3節の歌詞の通り「力と喜び与うる主より、賜物身に受け使命を受けて、仕えさせたまま終わりの日まで」と、これから聖職としての使命を与えられる太田信三聖職候補生を支え、また包み込むようであった。

説教者の市原信太郎司祭(中部教区)は東京教区の聖マルチン教会出身で、大畑主教の日曜学校の生徒であり、太田信三聖職候補生の日曜学校の先生でもあったという関係、もちろん神学院の礼拝学の先生でもあった。説教の中で市原司祭は、「執事按手は役職の任命式ではなく、神が欠点のある人間を聖別し、そのすべてを用いるために選び

出す行為」と語り、最後に太田

聖職候補生に向かつて「…あなたには執事の務めを十分に果たす自信がありますか」と問いかけた。その問いに「ありません」と答えると、「そういう君だからこそ神は執事として聖別し、この破れた世界で希望を見出す教会の務めを

果たす役割を行う者とするので」と声をつまらせないながら結んだ。

式後の挨拶で、太田新執事は「教会は主イエスを中心としてこそ教会であり…、一人ひとりが賜物を持ち

より、一つの体となつてこそ教会は神の国へと歩むことができる」と語り、私たちが教会への思いを新たに



執事按手を受けて

聖アンデレ教会牧師補

執事 太田信三

2016年1月9日、東京教区聖アンデレ主教座聖堂にて公会の執事に按手されました。様々な形での祝福をいただきましたことを、神さまに感謝します。

神さまが、キリストの体であるこの共同体に新たに執事を遣わされたことに、どのような意味があるのだろうか、と、祈り、問い続けています。祈祷書に、

「執事は、教会のすべての働きにおいて、ことにキリストのみ名によって、貧しい人、病気の人、苦しむ人、助けを必要とする人びとに仕えること…(日本聖公会

祈祷書426頁)」とあります。主は、この共同体が「貧しい人、病気の人、苦しむ人、助けを必要とする人びとに仕えること」を「キリストのみ名によって」絶え間なく行っていくべきでないでしょうか。しかし、この新執事は、ひとりでの務めを果たすことはできそうに

ちょっと聖書、ときどきユーモア (二十三)

1. 疲れた者は

信徒A「聖書に「疲れたもの、重荷を負う者は、誰でも私のもとに来なさい、休ませてあげよう」とあるけど、教会ではあまり説得力がないよね」

信徒B「どうして」

信徒A「だって、教会で一番疲れているのは、牧師だからね」

2. 遺伝

言葉を覚えたての子どもがやたらとよくしゃべるのを見て、牧師の妻「この子、あなたの遺伝を受け継いで、将来きっと牧師になるわね」

牧師「どうしてそう思うんだい」

牧師の妻「だって、やたらとよくしゃべるけど、何を言っているかわからないんですもの」

3. 神だのみ

信徒「お正月に、先生は神社に初詣に行ったそうですね」

牧師「はい、ちょっとお願いがあったので・・・」

信徒「まあダメというわけではないのですが・・・、一体何を願いましたか?」

牧師「もちろん『教会の信徒が増えますように』ってお願いしたよ」

ありません。何よりも、これまでわたしをたしかに導き続けて下さった主に、わたしはより一層信頼しなければなりません。皆さまに祈っていたいただき、正されなければ、わたしは主を信頼し続けることもできそうにありません。主はこうして、このような新執事をこの共同体に遣わすことで、わたしたちがより一層祈り合い、励まし合い、主と共に歩む群れとなるように導かれていくようにも思います。その歩みのなかで、わたしたちが主と共に歩むものへと変えられていったとき、主が示された務めは果たされるのではないのでしょうか。わたしたちが共に神の国を目指し、主と共に歩んでいくことができま

すように。そして、主が与えられた務めを「キリストのみ名によって」果たすことができますように。 編集後記 今回は大斎節が早く始まる都合で4頁立てとなりました。 1月24日に塚田重太郎執事が司祭按手を受けました。詳しい報告は次号でいたします。 今年は新執事、新司祭の誕生という嬉しい出来事が始まりました。多くの課題をかかえている状況ですが、1つずつ解きほぐしていく最初の年にしたいものです。 ◇ ◇ ◇ 次回 イースター号は3月27日発行予定